2011年７月15日発行

江戸遺跡研究会会報　No.127

江戸遺跡研究会
http://www.ao.jpn.org/edo/

下記の通り、会場が専修大学神田校舎になっています。お間違えの無いようにお願いします。

江戸遺跡研究会 第130回特別例会のご案内

日　時：2011年７月23日（土）14:00～17:00

内　容：境　　雅仁　氏　（武相文化財研究所）
「四番町遺跡（2次）の発掘調査～番町の旗本屋敷の庭空間～」
鈴木　裕子　氏　（株式会社 四門）
「神田淡路町二丁目遺跡の発掘調査」
斎藤　悦正　氏　（早稲田大学非常勤講師）
「神田淡路町二丁目遺跡の文献調査－小浜藩酒井家の絵図資料を中心に－」

会　場：専修大学　神田校舎　７号館３階　７３１教室

交　通：水道橋駅（JR）西口より徒歩7分
九段下駅（地下鉄／東西線、都営新宿線、半蔵門線）出口5より徒歩3分
神保町駅（地下鉄／都営三田線、都営新宿線、半蔵門線）出口A2より徒歩3分

問合せ：東京大学埋蔵文化財調査室　（堀内･成瀬）　03-5452-5103
江戸遺跡研究会公式サイト　http://www.ao.jpn.org/edo/

◇2011年１月29日（土）に第128回特別例会と併せて開催された、加藤晋平先生記念講演の講演録◇
◇と、文献史学の立場から発表をいただいた岩淵令治氏の発表要旨を掲載いたします。　◇

続・近世考古学雑感　－加藤晋平氏の軌跡に学んで－

岩淵　令治
（国立歴史民俗博物館）

はじめに

筆者は文献史学を専門領域とするが、近世考古学の成果に学ぶという立場から、いくつか機会を得て近世考古学の動向紹介や、書評・新刊紹介などをさせていただいてきた。

このうち「近世考古学の進展と近世史研究」（岩淵1991）では、調査対象の武家地集中や江戸集中という状況を越えるために、文献史学の研究者がよりいっそう近世考古学に関心を持つべきであるとした。そして、生活・消費、空間・景観といった論点、あるいは地域史での協業の場で近世考古学に学ぶべきことが多いと述べた。また、「近世考古学雑感」（岩淵1992　江戸在地系土器研究会第32回勉強会報告）では、「鎖国」論批判や生活史の欠如の指摘といった近世考古学の側からの文献史学への視線は、文献史学のリアルタイムの研究に向けられておらず、文献史学の”通説”を越えようという、近世考古学の黎明期ゆえの誤解であるとした。そのうえで、前川要著『都市考古学の研究』に垣間見える他分野の結論の輸入を批判し（のち岩淵1993）、『四谷三丁目遺跡』を素材に当時事例が少なかった町人地研究での学際研究の可能性を述べた。

その後、2004年には1991年の動向紹介を解題・補訂し（岩淵2004）、武家地集中については町人地・寺社地の調査が進展したこと、江戸集中については全国的な近世遺跡の調査の微増があったこと、しかしながら指定管理者制度施行以後の状況をふまえれば、さらに文献史学の側が関心を強く持つことが必要であることを述べた。そして、文献史学と近世考古学双方の視点の違いによる刺激が重要であること（北原1993）、より具体的には、渋江芳浩氏らが提起した「地点史」（八王子市宇津木台遺跡調査会1988ほか）を引用して、全ての論点・視点が調査と直結せずとも地点を共に調査するということで新たな発見がありうることをあらためて強調した。

この小文では、こうした既発表の拙文とは重複を避けつつ「近世考古学雑感」後の状況を事例を限って筆者なりにまとめたうえで、そのパイオニアである加藤晋平氏の研究にあらためて学び、自身の指針を示したい。

１　近世史研究と近世考古学の現在（いま）－いくつかの事例から－

まず、「近世考古学雑感」報告後、強く感じているのが、考古学研究者の側での独自の文献史料の活用である。たとえば今野春樹氏が墓制に関する良質な史料を紹介・検討しているように、調査報告書において考古学の視点から文献史料を積極的に検討している場合がある（今野1996）。文献史学の側に関心がなかったため、発掘調査を契機として新たに「発見」された文献史料も少なくない。さらに、関根達人氏らによる津軽藩領・松前の墓制の調査では、近世墓標の悉皆調査を過去帳・人別帳の情報と組み合わせることで、同地域の人口動態やライフサイクルまでを描き出すに至っている（関根

・澁谷編2007　関根編2010)。また、考古学者が地方史料や陶磁器の紀年銘を検討した論文や（森本2010など)、近世文学や文献史料を積極的にとりあげた研究書もあらわれている（寺島2005ほか)。ここではごく一部しか触れることはできないが、物質資料の分析をもととした視点から文献史料も読み、歴史像を描いていこうというのが近世考古学の現在の状況であろう。もはや、かつて黎明期にみられた文献史学の”通説”批判という次元は超克しているのである。

一方、近世考古学の論点に学んだ文献史学の成果もまとめられてきた。具体的には、武家地・武家屋敷（宮崎2010ほか)、成立期の江戸（北原1999)、下層都市民の死（西木1997)、御家人の生活（北原1990）などがあげられる。筆者自身も、本研究会で大会報告の機会をいただきながら、消費・都市内の流通（岩淵1997＜第10回大会報告＞・岩淵2004ａ)、「江戸」表象論に立脚しつつ行った江戸＝”清潔都市”・”リサイクル都市”論批判（岩淵2004ｂ＜第16回大会報告＞)、都市内の不断の造成とその担い手（岩淵2009＜第22回大会誌上報告＞・岩淵2010ｂ）についてまとめた。また博物館展示においては、装身具の企画展示で、伝世した美術工芸品とともに、代用品としてのガラスの簪・笄を演示し、庶民の生活の実相を示した（国立歴史民俗博物館2002)。さらに、谷川章雄氏をはじめとする多くの方々のご協力を得て、常設展示の中に近世考古学の論点を示すことにつとめた（久留島・岩淵2008ほか)。

いずれにしろ、文献史学・考古学の研究者にとって重要なのは、互いの単なる事実・論点の「輸入」や、安易な付会、都合のよい挿絵のような引用ではなく、双方の論点を自身の専門領域の研究史や問題にどのように位置づけるかであろう。それは、学際的な研究とはいっても、最後は研究者個人に帰する問題だからである。

２　加藤晋平氏の軌跡に学ぶ

こうした立場から、あらためて近世考古学を提唱された加藤晋平氏の仕事に学びたい。それは、近世考古学の黎明期において、一研究者としての学際的研究の規範を示され、さらに地方史・地域史という形で社会へ還元することを目指されたからに他ならない。

藤本強氏は、加藤氏の研究の特徴として、「いろいろな分野の調査や研究に先鞭をつけられた」ことをあげ、「大きく華開いたもの」として、「東北アジアの考古学の調査研究」とともに「近世考古学の開拓」をあげている（藤本2009)。

1969年の「近世考古学の提唱」（加藤・中川1969）の段階では、実施していた近世遺跡の調査は八王子市域の中世から近世初期の城郭に限られていたと思われる。こうした状況で行われたこの報告は、実践にもとづくというよりも、理念的な「宣言」だったのではないだろうか。こうした意味で、近世考古学の実践は、その後の浅草寺（略報1970年、加藤1971)、松山廃寺（1972年調査・報告書刊行1973年・加藤1973)、葛西城第二次調査（1973年調査、報告書刊行1974年、加藤1974)、都立一橋高校地点（1976年調査、加藤1977）の４遺跡の調査となるだろう。

浅草寺の調査は、五重塔の再建に伴うものであった。加藤氏は、近世期の絵図と遺構の不一致（三重塔の非存在）を指摘したうえで、瓦と文献史料そして紀念銘より、浅草寺の成立期を検討している。

つづく松山廃寺は、開発に伴う八王子市寺田遺跡群の発掘調査において、文献史料上で確認した同廃寺を調査したものである。氏は、遺物の原位置の確定を詳細に行ったうえで、地誌と地域の文献史料から寺院の備品との照合を行い、さらに地域は異なるが近世の風俗記録として知られる「秋山紀行」

から飲茶の習慣をとりあげて遺物の用途を解釈した。そして、調査報告書で以下のように主張している。

「考古学とは、土地に密接に結びついた科学である。その点から言って、考古学研究の一側面は、地方史、地域史の解明を目的としている。すなわち、一地方、一地域の庶民史を明らかにせねばならない責任を背負っている。それ故、地域開発にあたって、事前に、調査者は、その土地で血と汗を流して築いてきた庶民の物質資料を、全時代に亘り、保存、記録し、完全な庶民史を復元する義務があるはずである」

「近世であるならば、地方文書もあり、民俗学的な調査からの追求も可能であると考えられるが、Salvage　Archaeologyの実践が、地方文書の調査や民俗学的調査から出発した例を聞いたことがない。わたくしたちも、寺田村に残る地方文書や民俗学的調査から、この地区の調査を始めねばならなかった筈である」

「Salvage　Archaeologyの目的、内容、方法についての再検討をせねばならないのではないか」

氏の物質資料による地域史研究、さらに緊急調査における学際的な地域史研究のありようの必要性がきわめて説得力をもって展開されているといえよう。氏が説いた事前の文書調査や民俗調査は、時間的・予算的制約が強まった今日の緊急調査では実現は困難であり、調査者の努力に帰するところが大きい。氏の言葉の持つ意味は重い。

葛西城第二次調査は、環状七号線建設にともなう緊急調査であった。この調査における近世の青戸御殿の絵図と遺構の対応、文献史料と紀念銘資料を用いた絶対年代の付与、現存板碑の検討、一括廃棄のかわらけから行った儀礼の検討など、その分析方法は先駆的であり、重要である。のちに氏は、「歴史史料と考古資料の整合性について、理屈ではなく実践的に学ぶことができたのは、この発掘でした」（加藤2002）と述べている。さらに注目したいのは、保存問題も背景にしながら、地域の研究者、博物館、教育委員会において、研究蓄積と連携が図られたことである。こうした調査姿勢は、今日の葛西城をめぐるさまざまな文化・教育活動を産みだすきっかけとなったのではないだろうか。

こうした調査を経て、氏は都立一橋高校地点について都心部の「江戸」遺跡の最初の調査を実施するに至った。そして、４遺跡の調査に即した叙述を経て、氏は近世遺跡の調査の意義と課題を総括している（加藤1977a）。氏は、地中に埋もれた「もの」を発掘調査によって検出し、分析していく考古学は、文献史学・民俗学と相互補完の関係にあり、一地方史・地域史における「完全な庶民史の解明に不可欠」であることを強調する。そのうえで、①近世民家の調査、②信仰関係の塚や墓の調査、③庶民への陶磁器の浸透過程とそれを解明するために不可欠な地方窯の調査、④豊富な木製品の残存など東京低地帯（「下町」）の意義と調査の必要性を課題としてあげ、近世考古学を断片的・個別的な研究から「トータルな研究へと進めていく必要」を説いている。実際に、あげられた課題の多くはその後の近世考古学の展開においてテーマとなった。また、地方史研究の方法論に関するシリーズ（『地方史研究マニュアル』）に書かれたという点で、考古学のみならず他分野、あるいは学生や自治体に属する研究者にも近世考古学の認知を高める役割も果たしたと思われる。

さらに、都立一橋高校地点の調査をふまえ、氏は「江戸」遺跡について先駆的かつ重要な提言を行っている（加藤1977b）。氏は「法的な保存対策の上では、土の中の『江戸』は残念ながら盲点になって」おり、「一橋高校校庭遺跡の調査こそ、『江戸』考古学の市民権獲得のための第一歩であったと私は信じている」とする。そして、市民権を与えるために重要な三要素として、①「『江戸』考古

学に関し、十分な体験を経た研究者」－調査員の育成（「是非とも、都内で考古学調査をおこなう者、おこなわなければならない者たちの間で、江戸時代史、風俗史、建築学、民俗学、歴史地理学などの自主的な講習会を開き、新しい研究分野の先取りをする必要があろう」）、②「発掘の完全性に影響を与える十分に利用できる物的資材と報告公刊の十分性と速報性を有していること」、③「恒久的な安全性を有する遺物の処理、大衆の見学に供するための資料の有効性など」－収蔵施設『江戸』博物館の設立の要望をあげ、「行政・研究者・大衆が三者一体になって、保存のためのより良い方法・手段を見出すことがもっとも重要なことと考えるのである」としている。さらに、加藤1985では、④欧米にみる都市考古学という研究分野の一つとしての「江戸」考古学の提唱、⑤③の発展として「江戸」博物館（調査機能を持った恒久的な研究組織・機関）、⑥「江戸」遺構図（現在の地図に対照した「江戸」遺構の明確な分布図）の作成を課題としてあげている。①については、近世遺跡の調査に直面した調査員の方々の情報交換の場「江戸遺跡情報連絡会」として江戸遺跡研究会が誕生したこと、③⑤は加藤氏が目指した機能を完全に実現できているとはいえないが東京都江戸東京博物館が開館したこと、⑥は敷地割のレベルであるが『江戸復元図』（東京都、1989年）の刊行が想起されよう。④は、江戸遺跡の調査の大局的な目標の設定といえる。また、②については、経費や調査期間がよりいっそう厳しくなった発掘調査の委託化という現況を考えさせられる。

こうした姿勢や実践の根底にあるのが、「物質文化」研究という思想であり、方法論であろう。その形成には、氏が嘱託・非常勤講師として所属していた立教大学博物館学研究室という場が大きく作用したと思われる。当時、立教大学では中川成夫氏、宮本馨太郎氏らによる物質文化研究会（1963年～）の活動が展開していた。氏は、同研究室が新潟県南魚沼郡塩沢町（現新潟県南魚沼市）で実施していた民俗学・考古学・文献史学による地域調査の実践例をふまえながら、中川氏の「文化財学」の基礎として、「物質文化史学」を提唱している（加藤1972）。氏は、考古学と民俗学が主柱となって「もの」による一地域の「文書記録に残らない名もなき庶民集団の歴史」の解明をする「物質文化史学」が設立し、「文献史学の成果と混然一体となって、一地域の全歴史を明らかにし得る」と述べている。塩沢町の調査の知見は、さきの「秋山紀行」など氏の叙述にもたびたび援用されており、まさに氏の地方史研究の一つのモデルとなっていると思われる。なお、筆者自身は、氏の文献史学へのコメントは、史料が有力者の歴史に限られて文献史学が庶民の歴史を描くことが不可能であるなどということではなく、文献史料であらわれにくい重要な側面（日常、生活など）や、史料に規定された学問の問題関心を問題とし、補完関係を説かれたと受け止めている。

以上、加藤氏が描いてきた近世考古学に関する軌跡をみてきた。当時は、近世考古学の市民権を訴えていく必要があった近世考古学の黎明期であり、また開発にともなう調査の激増の中で、葛西城のみならず遺跡の保存運動を活発に展開していた時期であった。こうした時代の状況が異なっていてもなお、学際研究の方法、地方史・地域史研究への姿勢という点で、加藤氏の近世考古学の実践は、先駆的という月並みな言葉では言い尽くせない、重要な指針を今日にも与え続けているのではなかろうか。

おわりに

最後に、筆者が加藤氏の仕事から得た指針をあらためてまとめておきたい。

まず、第一は研究者個人による史資料の博捜、学際研究による社会の復元という姿勢である。文献

史学の研究者もひきつづき、考古学の研究動向を受信し、学際研究の場に参加していく必要がある。

なお、近年、筆者自身は大名家の葬儀に関心を持っているが（岩淵編2010ａ、2011予定）、この点で近世考古学の「大名墓研究」をめぐってはやや違和感を持っている。一つ目は、埋葬施設と副葬品で語ることができるのは墓制の一部ではないかということである。物質史料が基本的な分析対象であるのは当然であるが、加藤氏の学際研究の実践に照らせば、葬儀全体、そして当時における葬儀の社会的意味（支配層としての儀礼の意味など）は視野に入れておく必要があるのではなかろうか。二つ目は、社会的には墓制の研究が大名墓しか評価されなくなってしまう危険性を孕むと危惧するからである。「大名墓研究」の背景には、城に続く新たな観光資源としての着目もあろう。文化財調査や保護をめぐる厳しい状況の中で、筆者も観光利用を全面的に否定するのはものではない。しかし、墓制研究が大名のみに限定されることは、ほとんどが城と偉人顕彰にかかわるものであったかつての近世「史蹟」指定（岩淵2010ａ）に逆戻りしてしまうことになりはしないだろうか。この点で、総体として地域のさまざまな階層の墓標を"文化財としての近世墓標"としてとらえることや（関根・澁谷編2007、関根編2010）、国元に限らない大名墓の検討（関根2002、岩淵2004ａ）という視点が必要であろう。

第二は、「地域史」「地点史」における協業である。まず重要なのは、基礎となる報告書における協業関係であろう。文献史学で措定しえない「地点」は、新たな可能性を持った協業の場となる。ただし文献史学の場合、実際には、やや広い範囲から検討をすすめた方がかえって地点の性格が見えてくる場合も少なくない（岩淵1992）。宮崎勝美氏が「発掘地点という＜部分＞を理解するために、広い視野で＜全体＞（大名の江戸藩邸の場合は、屋敷全体、さらにその藩の屋敷総体、それに加えて幕府と藩との間の政治的関係、屋敷の内と外＜町や近郊農村＞）の分析をすすめた方が、かえって＜部分＞もよく見えてくる」と述べているが（宮崎1995）、同感である。こうした作業をふまえることで、さらに地点をつなげる、あるいは広げた分析が可能になってこよう。実践例として、小日向・小石川地域の開発（町田2004、岩淵2007・2010c）、継続的な調査が行われている染井遺跡の一連の報告書、駒込村の形成（岩淵2004ａ）などがあげられよう。

報告書の中には、文献調査が地点の基礎情報（土地の変遷と居住者の概要、被災の記録→敷地割の変遷と年表作成）に限定されるものが少なくない。経験的印象では、文献史学も"業務委託"形式より調査会形式の方が協業や意見の交換の機会が多く、しかも持続的である。もちろんケース・バイ・ケースだが、いずれにしろ基礎情報は多少なりとも面的に広げて報告書に記載し、蓄積することが重要ではなかろうか。

また、拝領者と土地の利用の変遷、年表の作成だけでは、研究上の発展は限界がある。資料的制約にもよるが、基礎情報に加え、調査にかかわる研究者は各論の執筆を可能な限り努力し、加藤氏が述べたような地域・地方への還元、"より完全な地域の歴史の再構成"を目指すべきであろう。

いずれも自戒も込めて、今後の課題としていきたい。

【引用文献】

今野春樹　1996「大名墓の墓域と埋葬施設について」『上野忍ケ岡遺跡　国立西洋美術館地点』、国立西洋美術館ほか

岩淵　1991「近世考古学の進展と近世史研究」『歴史評論』500号

岩淵　1992「近世考古学雑感」『江戸在地系土器研究会通信』30号
岩淵　1993「書評前川要著『都市考古学の研究』」『史学雑誌』102－２
岩淵　2004ａ『江戸武家地の研究』塙書房
岩淵　2004ｂ「江戸のゴミ処理再考」『国立歴史民俗博物館研究報告』118集
岩淵　2007「水戸藩小石川屋敷拝領前の拝領者と小石川村の開発」『春日町（小石川後楽園）遺跡　第10地点』、株式会社東京ドームほか
岩淵　2009「江戸武家地の土地造成－土木をめぐる社会史にむけて」（江戸遺跡研究会第22回大会誌上報告）
岩淵編　2010ａ『史跡で読む日本の歴史』第９巻　吉川弘文館
岩淵　2010ｂ「藩邸」『伝統都市』第３巻、東京大学出版会
岩淵　2010c「17世紀前半の低地開発と拝領者」『文京区後楽二丁目南遺跡』東京都埋蔵文化財センター
岩淵　2011（刊行予定）「近世大名家の葬送儀礼と社会」『国立歴史民俗博物館研究報告』第118集
加藤晋平　1971「浅草寺私考」『物質文化』18号
加藤晋平　1972「博物館実習における調査について」『MOUSEION　18』
加藤晋平・服部敬史編　1973『松山廃寺』、八王子市寺田遺跡調査会
加藤晋平・宇田川洋　1973「考古学と民俗学のあいだ」『物質文化』21
加藤晋平編　1974『青戸・葛西城址調査報告Ⅱ』、葛西城址調査会
加藤晋平・杉山京子　1974「葛西城の発掘調査」『史艸』15
加藤晋平　1975「近世の考古学研究と地方史」『地方史研究』133
加藤晋平　1977a「地方史と近世遺跡」『地方史マニュアル』５巻、柏書房
加藤晋平　1977b「江戸の埋蔵文化財」『文化財の保護』９号、東京都教育委員会
加藤晋平　1981「葛西城の発掘調査」『日本城郭大系』別巻Ⅰ、新人物往来社
加藤晋平　1981「歴史考古学ということ」『歴史公論』７－５
加藤晋平　1985「江戸時代の研究・今後の課題」『都心部の遺跡』、東京都教育委員会
加藤晋平・古泉弘　1985「江戸時代の考古学」『季刊考古学』13号、雄山閣
加藤晋平　1989「東京の中世考古学－中世学と中世考古学－」『文化財の保護』21
加藤晋平　2002「序」『中近世研究と考古学』、岩田書院、
北原糸子　1990「近世考古学に望むもの」『江戸のくらし』新宿区立新宿歴史博物館
北原糸子　1993「考古学と歴史学の方法的差異と共同研究の可能性について」『遺跡にみる幕末から明治』江戸遺跡研究会
北原糸子　1999『江戸城外堀物語』、筑摩書房
久留島浩・岩淵　2008「新しい展示のみどころ」『歴博』149号
国立歴史民俗博物館　2002『男も女も装身具』
関根達人　2002「近世大名墓における本葬と分霊」『歴史』99
関根達人・澁谷悠子編　2007『津軽の近世墓標』
関根達人編　2010『近世墓と人口史料による社会構造と人口変動に関する基礎的研究』（科研報告書）
寺島孝一　2005『アスファルトの下の江戸』、吉川弘文館
西木浩一　1997「墓標なき墓地の光景」（竹内誠編『近世都市江戸の構造』三省堂）
八王子市宇津木台遺跡調査会　1988『宇津木台遺跡群ＸⅡ』

藤本　強　2009「晋平さんの喜寿を祝して」『物質文化史学論聚―加藤晋平先生喜寿記念論文集』北海道出版企画センター
町田　聡　2004「文献調査の成果」『白銀町西遺跡・白銀町遺跡Ⅱ』、デイケイトレード
宮崎勝美　1995「近世都市史研究からみた江戸遺跡」『季刊考古学』53
宮崎勝美　2010『大名屋敷と江戸遺跡』山川出版社
森本伊知郎　2010『近世陶磁器の考古学－出土遺物からみた生産と消費』雄山閣

【付記】

加藤晋平先生をはじめ、これまで御教示くださった多くの方々にあつく御礼申し上げます。また、報告後、調査や研究でご一緒した森本伊知郎さんの訃報に接しました。これまでの学恩に感謝申し上げるとともに、ご冥福をお祈りしたいと思います。

なお、江戸遺跡研究会第22回大会誌上報告（岩淵2009）でとりあげた17世紀前半の細川家の上屋敷の普請のうち、「よしかき」を屋敷の葭を刈り取るとした解釈は、葭垣を周囲にめぐらせるという意味で、初歩的な誤読でした。岩淵2010ｂで訂正いたしましたが、あらためてこの紙面をお借りして、訂正させていただきたいと思います。

加藤晋平先生講演に寄せて

古泉　弘
（世話人代表）

日本考古学協会総会において、中川成夫・加藤晋平両先生による「近世考古学の提唱」の発表が行われたのは1969年の春ですから、すでに40年を回ったことになります。「提唱」以後の近世考古学の状況については皆さんの知るところですが、ここでもう一度原点に立ち戻って、私たち近世考古学にたずさわる者へご助言あるいは叱咤・激励を頂きたいと考え、加藤先生にご講演をお願いしました。

加藤晋平先生は1931年、東京・小岩町にお生まれになりました。1950年、千葉大学文理学部に入学され、神尾明正先生らに薫陶をお受けになりました。1954年に東京大学大学院人文科学研究科考古学専攻修士課程に入学、同博士課程に進まれました。東京大学では、オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡調査などに携わり、1961年に博士課程を単位習得退学されました。

61年以降は立教大学、日本女子大学、駒澤大学、千葉大学、東京教育大学などで非常勤講師を務められました。特に立教大学学校・社会教育講座では、考古学の中川成夫・岡本勇、民俗学の宮本馨太郎先生らとともに、博物館講座の充実に努められました。

1975年、筑波大学助教授に就任、79年に教授に昇任されました。筑波大学では、大学院歴史人類学研究科長、歴史人類学系長、第一学群人文学類長を歴任されました。また、1983年には国立歴史民俗博物館教授を併任（86年3月まで）されました。筑波大学在任中には、環境考古学の紹介と取り組みに努められたことが特筆されます。1986年には千葉大学にお移りになり、さらに國學院大學にお移りになって定年を迎えられたことは皆様ご承知のとおりであります。

この間、?東京都埋蔵文化財センター理事、東京都・千葉県などの文化財保護審議会委員、国の文化財保護審議会専門委員、平城・飛鳥藤原宮跡調査整備指導委員会委員、日本モンゴル学会副会長、イコモス日本委員会副委員長などを歴任、このほか各地の遺跡整備・調査などの委員を委嘱されてこられました。

＊　＊　＊

先生の研究領域・著作は多岐にわたっていて、多彩なジャンルを開拓してこられました。とてもその全貌を語る能力を持ち合わせていませんが、その主な開拓分野と業績を列挙しておきたいと思います。

旧石器文化・縄文文化の研究は、早くから先生の研究の基幹をなしてきましたが、1975年から『日本の旧石器文化』（共編・雄山閣）、1981年から『縄文文化の研究』（共編・雄山閣）を刊行され、研究の進展に寄与されました。こうした中で、特に北海道は大学院時代からのフィールドとして、各地に調査の足跡を残してこられました。旧石器文化の研究では、東アジアおよび北アジア全体の視点から研究を進められてきました。まだ日本人研究者の海外交流が希少であった頃、単身シベリア各地を訪れ、日本文化の源流について予察した『マンモス・ハンター』（1971年・学生社）は、当時の若手研究者・学生たちに大きな刺激を与えました。1985年には『シベリアの先史文化と日本』（六興出版）、88年には『日本人はどこから来たか』（岩波新書）を出版され、東アジアの中に日本の旧石器文化を位置づけるご自身の研究をまとめられました。

1980年代には、日本の考古学界に環境考古学を積極的に紹介、考古学の調査・研究の中に自然科学的な方法を導入、発掘調査の視点・方法に大きな影響を与えました。訳書として『環境考古学入門』（1982年・雄山閣）、著作として『環境考古学1・2（共著）』（1985年・雄山閣）などが知られています。

先生のご関心は古い時代ばかりではなく、中・近世にも向けられています。私たちに身近なところでは、1971年から開始された葛飾区葛西城址の発掘調査を主導され、中世考古学を実践的に手掛けられました。

先生が、現在最も熱心に取り組まれているのはモンゴルの調査と思われます。2001年頃から、モンゴル国立考古学研究所と共同でモンゴル最古の都市アウラガ遺跡の発掘調査を続けられ、チンギスハーンの宮殿址の解明などに当たられています。

＊　＊　＊

さて、近世考古学ですが、その出発点とされている「近世考古学の提唱」は、1969年に中川成夫先生と共同発表されました。実際に口頭発表に当たられたのは加藤先生です。発表の背景には、中川先生らと行っていた新潟県内の調査事例などがあります。先生は、理論的な提唱だけではなく、近世遺跡の発掘調査を実践されました。1971年には藤島亥次郎・中川成夫先生らと浅草寺の発掘調査を行い、72年には八王子市松山廃寺の発掘調査を行っています。翌73年には松山廃寺の調査をもとに「考古学と民俗学の間」（宇田川洋氏と共著・物質文化21）という論文を明らかにされています。

当時の考古学の研究状況は、土器の基礎的編年研究が一段落し、セトルメント・アーケオロジーに代表されるようなヒトの行動様式や文化・社会をとらえようとする新たな取り組みが始まったところで、加藤先生も北海道の旧石器時代を対象とした先駆的・実践的な研究を試みられています。松山廃寺の研究は、遺物の出土状況を民俗学の方法を取り入れて解釈し、近世社会の一端を明らかにしようとしたもので、物質文化研究の可能性を開いた重要な作業でした。

そして、1975年には、江戸遺跡調査の端緒となった都立一橋高校地点の発掘調査を主導されます。最初の大規模な江戸遺跡の発掘調査であったにもかかわらず、考古学、人類学、文献史学はもとより、自然科学的な分析・調査を多用した方法は、加藤先生の研究姿勢を具現したものであり、その後の江戸遺跡調査に大きな影響を与えました。

＊　＊　＊

ご紹介してきましたように、加藤晋平先生は、わが国の考古学研究者では、学者と呼べる数少ないお一人であります。そして、先述したように、近世考古学は加藤先生が開拓した多くのジャンルの中の一つであります。私たちは、先生が切り開いた道の一つを歩んでいることになりますが、これからも後進に対して適切なご指導を頂きたいと願っています。

なお、最後になりますが、先生のモンゴル研究に対する長年の業績を称え、昨年10月にモンゴル国科学アカデミーより「フビライハーン文化功労金賞」、人民政党大学より「チンギスハーン記念特別賞」が授与されました。併せてお祝いのご報告として付け加えさせていただきます。

【加藤晋平先生記念講演】

青戸御殿と私

1　青戸葛西城に出会うまで

真間の隠居の、取り留めもない昔話に、しばらくの間、お付き合いの程をお願いします。呆け老人故、勘違いや、事項・年月には誤りが多いと存じますが、なにとぞお許しください。

昭和18年に、私が入学した旧制中学は、戦後になり新制高校に変わりました。すると、軍国教育から解放されたせいでしょうか、学校が休みになると、房州の山野を、一人で、土器のかけらや石ころを拾って歩くようになりました。自分ではまっとうな勉強をしているつもりでした。

そして、こんな気楽な勉強ができればいいなと、勝手に思い込み、大学に入学しました。そこで藤田亮策先生、神尾明正先生にお会いし、はじめて考古学という学問がどんなものかを、教えて頂きました。しかし、その難しさには、房州の田舎から出てきたぼんくら学生には、お手上げでした。

同窓に、貝塚研究の第一人者であった酒詰仲男先生から直接薫陶を受けられた岡田茂弘さんがおられ、岡田さんから貝塚を勉強することの面白さを学ぶことができました。また、『楽園考古学』という著書で有名な篠遠喜彦さんがいて、昭和29年に渡米するのを記念した「歓送発掘」として稲毛の駅

近くの小さい貝塚で調査した際、岡田さんの誘いで参加することもできました。多分、まだ文化財保護法が制定される以前のことであったかと存じます。このようにして、私は、少しずつ、考古学を実践することの楽しさがわかってきたような気がしてきたのです。

その後、なんとなく大学院に進学しました。その頃の私は、歴史時代の考古学については、ほとんど興味を持っておりませんでした。しかし、指導教官であった駒井和愛先生は、私に、歴史時代の遺跡調査に参加するようにと言われました。また、漢籍を大切にする東洋考古学者の駒井先生は、絵合わせのような考古学では駄目なんだよと、私を哀れむように諭されました。

私は、ご命令に従い、浅野清先生のもとで奈良大安寺の発掘調査、藤島亥治郎先生のもとで平泉毛越寺・中尊寺の発掘調査などに参加し、工藤圭章、澤村仁さんなど建築史の仲間を得て、寺院址発掘のイロハについて手ほどきを受けました。これが歴史考古学とのはじめての出会いでした。

７年間に及ぶ院生生活から追い出され、先輩中川茂夫先生のもとで、立教大学博物館講座のお手伝いをすることになりました。そこで、博物館講座の運営に関与されていた宮本馨太郎先生から、民俗学には、考古学のような、遺物・遺構の年代を推定する層位学という方法論がないよという、嘆きを伺いました。宮本先生には、ご存じのように「露卯下駄の終焉」という民具の歴史的な形式変遷を追求した名著があります。

このような折、突然、庶民の物質資料を中心にした民俗学と、近世・近代の考古学とを融合した新しい研究方法を考えろと、中川茂夫先生の厳命が下りました。そして、昭和44年に、中川先生のご指示のもとに発表したのが、「近世考古学の提唱」です。指針だけの、あまり具体性のない内容でした。

当時、私の頭の中には、学生の実習として度々訪ねていた、佐渡や越後の農漁村での生活民具に関する実測図や写真による調査資料がありました。そこで、これらを使って、考古学の型式論に切り込めるかなと、漠然とした考えがありました。

申し上げるまでもなく、この発表は評価されませんでした。と申しますのは、当時、日本考古学を勉強しようとする学生にとって、指針書のひとつに、浜田耕作先生の大著『通論考古学』（大正11年刊）がありました。実は、この書には、考古学が研究対象とする時代は、奈良時代までであるとはっきりと書かれていました。ですから、中世以降の新しい歴史時代が、まともに考古学研究の対象であるとは、考えられていませんでした。

昭和45年に、私は台東区浅草寺の五重塔建築敷地の発掘調査に、荒木伸介先生とともに、参加することができました。調査地内からは、たしかに浅草寺草創期に繋がる古代末から中世にかけての遺物が多量に出土しました。それに伴って近現代の遺物も多数発見されました。なかでも、私の興味を引いたのは、舗装に使われていた煉瓦でした。それらは、明治時代に銀座の並木通りに使われていたものと同種であり、伊豆上河津の煉瓦窯址で生産されたものに類似しているように思いました。

これは面白いとばかりに、この話を、ある大先輩にしたところ、そんな産業廃棄物のようなゴミをどうするのだ、早く捨ててこいと、冷笑されました。まだまだ、中近世の考古学は、とても独り立ちができるような状況にありませんでした。

博物館講座の同僚であった岡本勇先生からも、数多くのことを教えて貰いました。先史学的な立場から、考古学資料とは、土地に住む人たちによって、作られ、使われ、放棄されたもので、その地域の歴史を明らかにする上で、きわめて重要なものだというご意見を伺いました。

確かにその通りだと思いました。が、中近世を対象とする考古学資料は、先史時代に比較して、商

業・経済的世界が著しく拡大し、人的・物的交流が、急速に広がった時代のものです。場所によっては文献記録類も十分でないにしても存在します。

しかし、それでもなお、土地に住む人たちの生活を明らかにするのには、文献史料とともに、物質資料をもとにする中近世の考古学研究が、その一端を背負っていて、間違いなく、郷土史構築の一つの柱であると、私は考えました。そして、重要なことは、中央からの目線ではなく、地方の目線であり、その視点に立って郷土史を描かねばならないのだと感じました。

このような時期に、博物館講座の実習として、文献記録にまったく記されていないか、あるいは不十分にしか残されていない中世城館址を取り上げて、昭和46年に、新潟県南魚沼郡湯沢町の淺貝寄居城を調査することになったのです。

この調査作業を共にすることで、私と同じような気持ちを持つ仲間が生まれ、以後、八王子市片倉城（昭和47年）、茨城県足高城（昭和47年）などについて、彼らと共に、考古学調査の基本である詳しい実測調査を行ったのです。従来、城郭研究においては、城の縄張りを模式的に示す絵図が主流でしたが、細かな等高線を用いた正確な地形図は、私たちにより多くの情報をもたらしてくれました。

実は、青戸葛西城の発掘が始まる何年も前に、昭和37年に実施された松戸市小金大谷口城の発掘調査の結果は、当時の城内における具体的な生活の様子を、それも文献記録には記されていない状況を示してくれたのです。この先駆的な調査は、中世城館址における考古学的な方法が、歴史復元の上で、きわめて有効な手段であることを教えてくれたのです。私が青戸葛西城に出会ったのはちょうどこのような時でした。

２　青戸葛西城と高松塚古墳

私は、昭和47年から、東京都葛飾区青戸七丁目に広がる青戸葛西城址の発掘調査に、幸運にも関わることになりました。この事業は、環状七号線の工事に伴う事前調査で、かつて徳川家の御殿があったとする伝承地御殿山を、建設道路が縦断する計画が起り、東京都、葛飾区の行政担当者と工事施行者の三者で協議され、かつ、葛飾区内の民間団体の後押しがあって、その確認調査が開始されたのです。

青戸御殿・葛西城址との出会いは、私の以後の勉強方法に、大きな転換期を与えてくれたのです。この十年間、調査を続けております、モンゴル国におけるチンギスハーン宮殿址とその都市遺跡の調査は、その延長上にあると思っております。

しかし、私はその頃でもまだ私の勉強の中心は、原始社会の解明だと思っていました。ところが、私のお粗末な論文のいくつかを読まれた池田次郎先生が、おまえの書いたものは、石ころや土器のかけらばかりで、人間が見えてこないとこっぴどく批判されました。お前の書きものの中から、人間が歩いた足跡が見えてこないと言われたのです。

石器の技術論とか、土器の形式論とかは、間違いなく考古学の正道だと、当時、私は考えていました。これらの手法は、今日でも考古学の正道であることは言うまでもありません。しかし、これらの結果だけでは、人類史の再構築を目標とする歴史科学としての考古学ではないと仰ったものだと思います。

そのためには、多くの関連諸科学、そしてさまざまな自然科学の成果を取り入れた学際研究が必要なんだと、私に教えられたのです。以後の私の勉強の仕方に、そして青戸葛西城の発掘にも、是非と

も、先生の教えは活かさなければと考えました。

昭和47年から開始された葛西城址の発掘調査は、宇田川洋、鶴丸俊明、越田賢一郎、橋口定志、古泉弘さんらの多くの素晴らしい仲間たちのおかげで、確実に成果を挙げました。

昭和47年度の確認調査では、建設予定の道路中央線に沿って、試掘溝９カ所、120平方メートルほどを発掘しました。これによって、今後の本調査に向けて、はっきりとした見通しを立てることができたのです。

まず一つは、弥生時代後期、そして古式土師器の破片が見つかったことです。古代における人々の生活痕跡が、この地域一帯に広く広がっていたことが明らかになりました。二つ目は、室町時代中期以降の、16世紀と思われる水濠を発見したことです。この水濠で、各曲輪を区切った、平地城としての葛西城の存在を、確認することができたのです。三つ目は、伝承としての徳川家の御殿跡ですが、これもこの確認調査で明確になりました。

そこで、私は、昭和47年度の確認調査報告書に、ちょっとばかり独りよがりのことを書きました。

「(この遺跡が)、重要なことは、葛飾区内ではじめての中世居館址のたしかな発見という事実である。もちろん、都内低地帯でもはじめての発見である。何とかして、この区民の、都民の、かつ、国民的財産を後世に伝えたいと願うのは、わたくし一人の想いだけなのであろうか」

青戸葛西城遺跡が、かけがえもない重要な歴史的遺産であることを、識者の皆様方、同時に工事施行者の方にも、ご理解を頂き、計画路線を別ルートに変更して欲しかったからです。もちろん、それは叶いませんでした。

昭和48年からは、記録保存に向けて、計画道路にかかる遺跡全面について調査を開始しました。この調査によって、貴重な遺物群が相次いで発見されました。アケビ蔓で編んだ天目台、漆器椀、そして折敷・箸などの木製品類などが多量に出土したのです。それらは、地下水位の高いこの土地のみに残された中世・近世の人たちの生存記録なのです。

仲間たちと遺跡保存について話し合いました。基盤整備のために、地下深く掘削工事がされたら、地下水位が下がり、木製品類が一挙に消滅してしまう。路線変更ができなければ、六号線を越えた陸橋を、そのままの高さで、葛西城の上に土盛をして通すことはできないだろうか。このような意見を、施行者の方たちに申し上げましたが、道路沿いの住民の利益のためにそんなことはできないと、すぐに却下されました。

続いて行われた昭和49年の調査では、地下の葛西城の全貌が見えてきました。南北に70メートル程離れて大きな水濠が東西に走り、葛西城本丸址の輪郭が明らかになったのです。この環状七号線の工事は、葛西城の本丸を真っ二つに分断することが明白になったわけです。私たちは、再再度、施行者の方に、道路を高架にするか、隧道にするかして、本丸そのものを東西に切断することのないように、工法を変えて頂けないかと申し入れました。当然、これも無理なお願いでした。

昭和49年の報告書のまとめに、私はこのように書きました。「高松塚が貴重なものであり、葛西城はつまらぬものであるという判断が往々にしておこなわれる。この判断は、まさに戦時中の苦い経験に通ずるものがある。中央の歴史がつねに正しく、地方の歴史がいつでも踏みつけにされるという姿勢は糾さねばならない。」

高松塚古墳は、青戸葛西城の調査と時を同じくして、奈良県明日香村で、昭和47年に発見されました。この古墳は、藤原京時代のもので、珍しい彩色壁画を持っているということで、あらゆるメデイ

アが争って報道しました。そして、直ちに翌年、国特別史蹟に、同時に壁画も国宝に指定されました。

おそらく、奈良県内の幹線道路の計画路線が、高松塚古墳を分断するとすれば、施行者は調査者の意見を素直に聞き入れて、路線計画を変更したことでしょう。私はこのようなあり方に違和感を感じておりました。

高松塚古墳に葬られた、それがたとえどんな高貴な方の遺体であっても、一方、葛西城本丸北側の水濠中から斬首された無名の美女の頭骨が発見されていますが、そのいずれの命の重さは同等であるはずです。にもかかわらず、施行者の皆さんは、私どもの意見を聞き入れてくれず、結局、葛西城本丸を分断することになってしまったのです。

その時の私自身の怨みがましい気持ちを表したのが、先ほどの一文なのです。日本人の歴史観は、つねに文化は、西に高く東に低いということを、今更ながらに痛感したのです。と同時に、中・近世考古学が、まだまだ市民権を持っていないということも実感したのです。

ちょうどこの頃、昭和48年に、私は宇田川さんと一緒に、八王子市にある近世の松山廃寺を調査し、報告をしました。その報告は、当時、若手研究者の間でもて囃された、アメリカの先史学者が提唱した歴史再構成の理論を取り入れて組み立てた論文でした。近世考古学発展への多少なりとも、裏付けになればよいと考えておりました。

しかし、これがどれだけの方々に共感を持って頂けたかは不明です。ただ、近世文献史学者の先生に取り上げて頂き、厳しいご批判を頂いたことを思い出します。

３　青戸葛西城の落城

昭和47年から昭和56年までの十年間をかけて、宇田川さん、鶴丸さん、古泉さんなどが、それぞれ中心になって、道路敷地にかかる葛西城址全面域の丹念な発掘調査をおこない、終了しました。そして、道路建設が始まったのです。私は、ここに葛西城本丸を壊してもよいという免罪符を与えたのです。それ故、この調査の責任者である私は、葛西城を落城させた裏切り者の汚名を受けることになりました。

過日、何年ぶりかで、かつての発掘現場に立ちました。幅30メートル以上の立派な環状七号線道路を間に挟んで、西側には、昭和３年建立の「青砥藤綱城址」の碑などが立っている御殿山公園が、そして東側には葛西城址公園が、それぞれ遙か遠くに相離れて、ばらばらに独立して築成されています。

交通量の激しいこの道路を境にして両者を結ぶのは、押しボタン式信号機のある横断路だけです。これでは中世葛西城や徳川家御殿の歴史的景観を、訪問者達は、とうてい頭の中に思い浮かべることなどできないでしょう。実に悲しい風景です。

このような中途半端な景観にもかかわらず、葛西城の歴史的重要性を認識して頂き、東京都の史蹟として平成十年に指定されたことは、たいへんに有り難いことと思っております。

ところで、西側の御殿山公園内、この東京都指定史蹟の標識の向かい側に、『葛西城を偲ぶ』と題された碑が、葛飾区によって建てられています。碑文の最後の部分を紹介します。

「時は変わって、環状七号線道路が葛西城の上を走ることになり、昭和47年から十年間に及ぶ発掘調査を行い、その結果、この地は弥生時代後期から近世初頭に及ぶ大規模な複合遺跡であることがわかった。とくに中世葛西城関係の出土資料はその当時の歴史を知る上で極めて重要なものである。今は近代化の波に洗われる一方、本遺跡工事を契機によみがえった葛西城を偲んでこの碑を建てるもの

である。平成元年３月葛飾区」

実は、落城手引者の私には、最後の一文が、次のように読み取れてしまうのです。

「今や近代化の波に洗われ、その波浪によって葛西城は落城の憂き目を見ることになり、悲しくも本遺跡工事を契機に消え失せてしまった葛西城を偲んでこの碑を建てるものである。」

とすれば、この碑の表題は、『葛西城落城の記』とすべきものなのです。そして、この碑は、葛西城落城の手引きをした、私自身を弾劾する碑でもあるのです。今後ともこの場所には、あまり立ちたくありません。

数年前、友人の中国人研究者の蓋培さんと北京で会いました。その折、考古研究所をリタイヤした蓋さんは、今は静かに『老子』を読んでいますと言われました。

私も帰国後その本を手にしました。それは、戦国時代の処世術とも言うべき内容で、実に難解なものでした。しかし、その中で目にとまった一文があります。

「兵法に次のような言葉がある。自分から攻勢をとるな、むしろ守勢にまわれ、一寸でもむりに進もうとするな、むしろ一尺でも退け、と。」（蜂屋邦夫訳注『老子』岩波文庫）。

当時、私たちは、ただ、がむしゃらに葛西城の保存を願って関係者に陳情をしましたが、それは一歩下がってお願いすれば、むしろ良い結果が得られたのかもしれません。もう少し早く蓋培さんに会えていれば良かったなと思います。

ところが、昔の光り今いずこの葛西城を、見事に、復興させた方がおられます。葛飾区郷土と天文の博物館の谷口榮さんです。谷口さんは、この二十年間、何れも高い評価が与えられる葛西城関係の著書・論文を相次いで発表されてきました。

また、中世史学者と共同して、葛西城についてのシンポジウム、特別展を開催し、息も絶え絶えな葛西城の存在を世の人たちに広く知らしめたのです。葛西城の知名度は、いやが上にも高くなりました。深く感謝を申し上げねばなりません。

反して、手引き者の私は、主家上杉家に寝返った太田康資のように、房州へこそこそと蟄居しなければならないでしょう。

今、ネットで、「中世考古学」「近世考古学」の項目をそれぞれ検索しますと、いずれも五万件以上もヒットします。素晴らしい時代になりました。もちろん、その蔭には多くの研究者の皆様方の、多年にわたるたゆみないご努力があったからです。

そこで、大先達の浜田耕作先生には、甚だ申し訳ないのですが、『通論考古学』の中で、考古学の対象とする時代を、書き直して貰わなければなりません。

最後になりましたが、ここ何十年もさまざまな問題を乗り越えて、ご努力をされてきた、中近世考古学の研究者の皆様方には、改めて深く深く感謝を申し上げねばなりません。

ところで、中近世の文化財に関しまして、平成10年の文化庁次長通知で「円滑化通知」というのが出されたことはご存じだと思いますが、その中で埋蔵文化財として扱う範囲に関する原則というのが示されました（平成10年9月29日庁保記第７５号文化庁次長通知「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等について」）。その一つは「おおむね中世までに属する遺跡は、原則として対象とする」、二番目は「近世に属する遺跡については、地域において必要なものを対象とする」、それから三番目は「近現代の遺跡については、地域において特に重要なものを対象とする」。つまり、少なくとも、中世考古学に関しては市民権を得たが、近世・近代についてはその土地で考えろということが示されたわけ

です。この通知の中で埋蔵文化財として扱う範囲の一基準の要素という部分がありまして、遺跡の所在する地域の歴史的な特性、文献・絵図・民俗資料その他の資料との補完関係などが副次的要素として入っています。民俗資料も基準の要素のひとつに載っており、私が曽ておぼろげながらに考えた民俗学と考古学との融合性ということが、ようやく日の目を見つつあります。これは言うまでも無く、中近世を調査する皆様方による絶え間ない大変なご努力があったからこそ、このような文化庁通知が出される結果になったのだと思うのです。改めて、皆さん方に深く感謝を申し上げる次第であります。

ご静聴を有難うございました。

◇江戸遺跡研究会第129回例会は、2011年5月18日（水）午後7時より江戸東京博物館学習室2にて行◇
◇われ、新垣　力氏より以下の内容が報告されました。◇

「沖縄の近世考古学」現状と展望

新垣　力
（沖縄県立埋蔵文化財センター）

１．はじめに

一般に「沖縄の近世考古学」とは、歴史学にいう「近世琉球」、すなわち1609（慶長14）年の薩摩藩による琉球侵攻から、1879（明治12）年の明治政府による琉球処分及び沖縄県設置までの期間を対象としている。この時代区分が考古学的に有効か否かについては議論もあるが、今回は通例に従い上記年代観を援用して、以下に「沖縄の近世考古学」の歴史と現状、現時点での課題と今後の展望を簡単に述べる。

２．「沖縄の近世考古学」について

（１）これまでの歩み（発掘調査から）

①沖縄戦前～日本復帰前

在地産陶器研究に伴う窯跡の調査（踏査・試掘）を単発的に実施。

②日本復帰後～現在

●史跡等に指定された遺跡の調査（保存修理に伴う遺構確認）が開始される。

例：識名園（しきなえん）（那覇市）、仲泊（なかどまり）遺跡（恩納村　※一部に「歴史の道」あり）
首里（しゅり）城跡（那覇市）→現在も継続

●80年代前半より、記録保存対象の埋蔵文化財としても扱われるようになる。

例：上勢頭（うわせいど）・下勢頭（かせいど）古墓群（北谷町）→米軍基地内工事（那覇防衛施設局）
古我地原（こがちばる）内古墓（石川市≒現うるま市）→高速道路建設（日本道路公団）
湧田（わくた）古窯跡（那覇市）→県庁舎建設
壺屋（つぼや）古窯跡（那覇市）←個人住宅建設

（２）現状と課題（発掘調査・研究から）

①発掘調査

平成21年度に県内で実施された発掘調査74件中、近世遺跡（複合遺跡含む）の発掘調査は23件（全体の約31％）。うち古墓の調査は11件で、近世遺跡の約48％を占める。以下、これまで調査された主な遺跡を紹介する。

a）政治関連遺跡（図版1-1、2）

●首里城跡：琉球の王城。築城年代は不明だが15世紀前半には存在したとされる。近年は国王一族及び女官達の生活の場である「御内原（うちばる）」の発掘調査で、17世紀前半の遺構・遺物を確認。

●中城御殿（なかぐすくうどぅん）跡：次の国王である世子の邸宅。1873（明治6）年に旧県立博物館敷地に移転。建物跡・庭園跡の他、遺物は中国磁器や肥前磁器の碗皿類が目立ち、大名屋敷を髣髴とさせる器種組成を呈する。

b）宗教遺跡（円覚寺（えんかくじ）跡：図版1-3）

●1494（明応3）年に創建された第二尚氏の菩提寺。石牆に囲まれた敷地内に伽藍施設の遺構を多数確認。現在は史跡整備中。

c）集落遺跡（図版1-4、5）

●首里旧金城（かなぐすく）村跡：首里城の南側に展開する集落遺跡。個人住宅建設に伴い小面積の調査が多数実施されている。

●普天間（ふてんま）古集落遺跡：米軍基地内に所在する集落遺跡。施設建設に伴う大規模調査により、素掘りの溝状遺構で区画した集落構造を確認。

d）交通遺跡（真玉橋（まだんばし）跡：図版1-6）

●1522（大永2）年に首里城と那覇港を繋ぐ「真珠道（まだまみち）」の一部として築造され、1708（宝永5）年に石橋に改修。石橋五座や木造船を確認。

e）生産遺跡（湧田古窯跡、喜名（きな）古窯跡：図版2-7、8）

●1616（元和2）年に薩摩より招聘した朝鮮人陶工が関与したとされる湧田古窯跡、17世紀後半からの操業が想定される喜名古窯跡などの調査により、瓦窯や陶器窯と推定される窯体・物原・廃棄土坑など様々な遺構を確認。

f）墓地遺跡（銘苅（めかる）古墓群、ヤッチのガマ、嘉田（かだ）地区古墓群：図版2-9～11）

●近世遺跡の調査事例では最も多い。主に崖地に横穴を掘って墓室を形成するが、自然洞穴の利用や平地に石積墓を築く場合もある。埋葬方法としては遺骸を骨化させた後、洗骨して蔵骨器（厨子甕（ずしがめ）とも称される）に納める二次葬が主体。陶磁器をはじめとする多種多様な副葬品がみられる点も特徴的。

g）災害関連（嘉良嶽（からだけ）東貝塚：図版2-12）

●1771（明和8）年の地震による地割れや津波の痕跡を確認。

②研究

●遺物研究が主体で、在地の窯業製品、特に瓦研究は蓄積されている。陶器類は泡盛容器としての流通をはじめ、編年や技術伝播の問題にも着手され始めている。その他は外来品（清朝陶磁・国産陶磁）の編年や流通、花卉園芸文化に関するもの等がある。研究事例は近年増加傾向にあるが、近世琉球社会の様相に迫る内容はまだ少ない。

●古墓に関しては、既に民俗学側に蔵骨器の編年や墓の変遷変化等で蓄積があり、考古学側から新たな視点を提示するまでには至っていない。近世遺跡中最も豊富なデータをどう活用するか、

今後の課題といえる。

３．今後の展望

（１）陶磁器研究（編年・流通・技術伝播）とその文化的背景

①清朝陶磁器（図版3-13～16）

●沖縄出土の清朝陶磁器のうち、最も多いのは徳化窯産の製品（腰の張る端反口縁の青花・色絵の碗皿類、型成形で口禿の青花・色絵・白磁の碗皿類。年代は18世紀後半～19世紀）である。特に後者は江戸でも一定量出土するため、当該資料の流通経路として琉球ルートの機能が考えられる。

●上記に関連して、宜興窯産紫砂と煎茶文化の伝来に琉球が関わった可能性もある。しかし、琉球では紫砂を酒器として利用した例が多数あると思われ（絵画資料・墓の副葬品・伝世資料など）、単純な評価は難しい。

②国産陶磁器（図版3-17）

●琉球には多種多様な国産陶磁器が輸入されているが、当該地域独特の製品といえるのが肥前産染付の小型徳利（17世紀後半）である。主に古墓の副葬品として納められ、意図的に口縁部を破損させた資料もみられる。同種の製品は国内ではほとんど流通しておらず、琉球側の需要に応じたものと考えられる。18世紀以降は在地の陶器が主体となる。

③沖縄産陶器（図版4-18、19）

●江戸のほか京都・大阪（堺）・石川（金沢）・博多湾・長崎・鹿児島（島津城下）で出土。製品だけでなく内容物も含めた流通の問題が考えられる。著名な例は泡盛の容器として流通した無釉陶器徳利だが、それ以外に植木鉢と植物（例えば蘇鉄など）の関係も興味深い。

（２）清朝磁器の薬瓶にみる唐薬の流通（図版4-20）

●沖縄では首里城跡やその関連遺跡を中心に、「平安散」銘の青花小瓶が数例出土している。この製薬元と思われる北京同仁堂を近世琉球人が訪ねたという記録や、当該期に琉球の医者が医療技術（製薬方法含む）を学びに中国に渡った記録があるため、当薬の流通に関する一経路として考えることも可能か。ちなみに、他に薬瓶と判断される資料は現時点で未確認。

（３）煙管研究と煙草の伝来（図版4-21、22）

●沖縄出土の煙管には石製・瓦製のものがあり（いずれも雁首のみで吸口は未確認）、これらは国内他地域に類例のない特徴的な資料とされる。形態は柱状形と釣鐘形があり、前者から後者への型式的変化が想定できるが詳細は不明。近世を通じて製作され続けたと思われるが、初現は16世紀代に遡る可能性がある。

●煙草は萬暦年間（1573～1620年）に薩摩から伝来し、17世紀第1四半期段階では那覇に喫煙の習俗が普及していたとされる。しかし、前述のように最初期と思われる煙管に日本的要素が見出し難いことから、煙草の伝来ルートについても再考が必要であろう。

（４）集落の形態・構造に関する研究

●近年集落遺跡の大規模な調査事例が増加し、いわゆる近世集落を考古学的成果から検討できる状況になりつつある（例えば石垣を持たず素掘りの溝状遺構に囲まれた屋敷地や、方形地割に基づく集落形態の初現及び展開など）。

４．おわりに

以上、「沖縄の近世考古学」の現状と課題、及び今後の展望について簡単に述べた。まとまりのない内容で恐縮だが、沖縄と同様に30年超の調査事例を蓄積し、沖縄以上に学際的な取り組みが進む江戸遺跡研究会で発表させて頂く事で、多くのご指導及びご助言が頂戴できれば幸いである。

【参考文献】

安里嗣淳　1990「琉球王朝の考古学」『月刊考古学ジャーナル』№322　ニュー・サイエンス社

池田榮史　2003「近世～現代の考古学の概観と特徴」『沖縄県史　各論編　第二巻　考古』沖縄県教育委員会

石井龍太　2009『琉球近世物質文化の多角的研究』

沖縄県立埋蔵文化財センター（編）　2009『平成21年度企画展　考古資料にみる日本・沖縄』

沖縄考古学会（編）　2009『沖縄考古学会創立40周年記念　2009年度研究発表会資料集　テーマ　考古学からみた薩摩の侵攻400年』

小田静夫　2008『ものが語る歴史シリーズ⑯　壺屋焼が語る琉球外史』同成社

島　　弘　1998「沖縄の近世相当期の発掘調査から－最近の首里・那覇の調査事例を中心として－」『月刊考古学ジャーナル』№430　ニュー・サイエンス社

萩尾俊章　2004『泡盛の文化史－沖縄の酒をめぐる歴史と民俗－』ボーダーインク

１．首里城跡（那覇市）

国王一族及び女官達の生活の場「御内原」から、17世紀前半の廃棄土坑を検出。

２．中城御殿跡（那覇市）

次期国王である世子の邸宅。調査では往時の建物跡・庭園跡等を検出。

３．円覚寺跡（那覇市）

1494年に創建された第二尚氏の菩提寺。石牆で囲まれた敷地内に多数の伽藍施設を確認。

４．首里旧金城村跡（那覇市）

首里城の南側に広がる集落遺跡。「フール」と称される豚小屋を兼ねた便所跡を検出。

５．普天間古集落遺跡（宜野湾市）

米軍基地内に所在する集落遺跡。素掘りの溝状遺構で区画された屋敷地？を複数確認。

６．真玉橋跡（那覇市・豊見城市）

1522年木造五座で築造され、1708年に石橋に改修。調査ではアーチ構造を持つ石橋等を検出。

図版１　発掘された沖縄の近世遺跡（１）

７．湧田古窯跡（那覇市）

16 世紀代からの操業が想定される。瓦を焼成したと考えられる煉瓦造りの平窯を検出。

８．喜名古窯跡（読谷村）

17 世紀後半からの操業が想定される。陶器を焼成したと考えられる土造りの単室登窯を検出。

９．銘苅古墓群（那覇市）

「伊是名殿内の墓」と称される亀甲墓。18 世紀後半～末の築造と想定される。

10．ヤッチのガマ（久米島町）

自然洞穴内を石積みで区画して墓室を形成。500 個以上の蔵骨器や 1, 000 体以上の人骨が出土。

11．嘉田地区古墓群（与那国町）

平地に築かれた石積墓で、上面観は方形を呈する。他に一次葬の地下式石棺墓もある。

12．嘉良嶽東貝塚（石垣市）

1771 年に石垣島近海で発生した地震による痕跡。他に津波の影響とされる白砂層も確認。

図版２　発掘された沖縄の近世遺跡（２）

13. 徳化窯産白磁（嘉田地区古墓群出土）

国王一族及び女官達の生活の場「御内原」から、17世紀前半の廃棄土坑を検出。

14. 徳化窯産色絵

（嘉田地区古墓群・真珠道跡出土）

15. 宜興窯産紫砂（首里城跡出土）

17. 肥前産染付徳利（ヤッチのガマ出土）

16. 婚礼酒宴の図（作者不詳）

※紫砂茶壺を酒器として使用している

図版３　「沖縄の近世考古学」の展望（１）

18. 日本に輸出された沖縄産陶器（類品）

20. 青花小瓶（湧田古窯跡出土）

将軍への献上泡盛

年号	使名	献上者	名称	数量	被献上者
1634（寛永11）	謝恩	尚豊 佐敷王子	焼酎 焼酎	5 3	家光
1644（正保1）	謝恩	尚賢 金武王子 国頭王子	焼酎 焼酎 焼酎	5 3 2	家光（若君誕生使節）
		尚賢 金武王子 国頭王子	焼酎 焼酎 焼酎	10 2 2	竹千代（家綱）
1646（慶安2）	謝恩	尚賢 具志堅王子	焼酎 焼酎	5 2	家光
		尚賢 具志堅王子	焼酎 焼酎	3 3	家綱
1653（承応2）	慶賀	尚賢 国頭王子	焼酎 焼酎	5 2	家綱
1671（寛文11）	謝恩	尚貞 金武王子	泡盛酒 泡盛酒	5 2	家綱
1682（天和11）	謝恩	尚貞 名護王子	泡盛酒 泡盛酒	10 2	綱吉
		尚貞 名護王子	泡盛酒 泡盛酒	10 2	若君（家宣）
1710（宝永7）	謝恩	尚益 美里王子	泡盛酒 泡盛酒	10 2	家宣
		尚益	あわもり酒	5	家宣夫人
		尚益 豊見城王子	泡盛酒 泡盛酒	5 2	家宣
		尚益	あわもり酒	3	家宣夫人
1714（正徳4）	慶賀	尚敬 与那城王子	泡盛酒 泡盛酒	10 2	家継
		尚敬	泡盛酒	5	天英院（家宣夫人）
		尚敬	泡盛酒	3	月光院（家継生母）
	謝恩	尚敬 金武王子	泡盛酒 泡盛酒	5 2	家継
		尚敬 尚敬	泡盛酒 泡盛酒	3 2	天英院 月光院

年号	使名	献上者	名称	数量	被献上者
1718（享保3）	慶賀	尚敬 具志川王子	泡盛酒 泡盛酒	10 2	吉宗
1748（寛延1）	慶賀	尚敬 具志川王子	泡盛酒 泡盛酒	10 2	家重
		尚敬 具志川王子	泡盛酒 泡盛酒	5 2	大御所（吉宗）
		尚敬 具志川王子	泡盛酒 泡盛酒	5 2	大納言（家治）
1752（宝暦2）	謝恩	尚穆 今帰仁王子	泡盛酒 泡盛酒	5 2	家重
		尚穆	泡盛酒	2	若君（家治）
1764（明和1）	慶賀	尚穆 読谷王子	泡盛酒 泡盛酒	10 2	家治
		尚穆 読谷王子	泡盛酒 泡盛酒	5 2	若君（家斉）
		尚穆	あわもり酒	?	家治夫人
1790（寛政2）	慶賀	尚穆 宜野湾王子	泡盛	10 2	家斉
		尚穆	あわもり酒	2	家斉夫人
1796（寛政8）	謝恩	尚温 大宜味王子	泡盛酒 泡盛酒	5 2	家斉
		尚温 大宜味王子	泡盛酒 泡盛酒	3 2	若君（家慶）
		尚温	泡盛酒	?	家斉夫人
1806（文化3）	謝恩	尚灝 読谷王子	泡盛酒 泡盛酒	5 2	家斉
		尚灝	阿骨照利酒	3	若君（家慶）
		尚灝	阿骨照利酒	3	家斉夫人
1832（天保3）	謝恩	尚育 尚灝(前国王) 豊見城王子 沢岻王子	泡盛酒 泡盛酒 泡盛酒 泡盛酒	5 3 3 3	家斉
		尚育	泡盛酒	3	内府（家慶）
1841（天保13）	慶賀	尚育 浦添王子	泡盛酒 泡盛酒	10 2	家慶
1850（嘉永3）	謝恩	尚泰 玉川王子	泡盛酒 泡盛酒	5 2	家慶

（宮城栄昌「琉球王府の外交用泡盛」より）

19. 将軍への献上泡盛一覧表（萩尾 2004 より）

21. 瓦製煙管（首里城跡出土）

22. 石製煙管（古我地原内古墓出土）

図版４　「沖縄の近世考古学」の展望（２）

最近の近世考古学関連文献

【単行本】

淡交社　2011.6「仁清・乾山　いま明かされる、名工の真実」『淡交別冊』第59号

【論文・資料紹介】

中村若枝　2011.3「横浜外国人居留地のイヌたち－横浜市山下居留地遺跡出土埋葬犬をめぐって－」『考古論叢　神奈河』第19集、神奈川県考古学会

相羽重徳　2011.5「出土資料にみる近世会津藩領への陶磁器流通とその周辺」『三面川流域の考古学』第9号、奥三面を考える会

河田健司　2011.3「岡山市内出土の織部焼に関する一考察」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第3号、岡山市教育委員会

【展示図録】

東京大学総合研究博物館　2011.4『弥生誌　向岡記碑をめぐって』

明治大学博物館　2011.6『漆器』

【発掘調査報告書】

〇千代田区

東京都埋蔵文化財センター　2011.3『溜池遺跡　－衆議院新議員会館整備等事業に伴う調査－』東京都埋蔵文化財センター調査報告　第258集

※丹羽家上屋敷長屋地区の調査。建物跡、池、地下室、土坑、石組、木組、木樋、井戸などの遺構や、屋敷の造成に関わる土留め遺構などが検出され、屋敷の段階的な拡張の変遷を確認。

株式会社　四門　2011.3『東京都千代田区 神田淡路町二丁目遺跡』

※大名屋敷（譜代大名）地の調査。低地に位置していることから、湧水利用の井戸、井戸枠を据えた帯水層利用の池、神田上水からの木樋、竹樋などを検出。鍋島や貿易陶磁器が出土。

大成エンジニアリング株式会社　2011.3『千代田区二番町遺跡』

※旗本屋敷「加藤家」の調査。検出遺構からは、4時期の変遷と、敷地内空間構成の特徴を確認。

〇中央区

中央区教育委員会　2010.3『松平越前守屋敷跡遺跡（新川2-23地点）』

※松平越前家の屋敷の調査で、3面の遺構面を調査。大規模な石垣、入掘を検出。18世紀後葉の土坑から鍋島出土。

〇新宿区

有限会社CEL　2011.5『東京都新宿区 市谷仲之町西遺跡Ⅳ』

※17世紀中葉～幕末にかけての武家屋敷跡（根来組与力）の調査。遺構、遺物の主体は18世紀後半～19世紀前半にかけて。掘立柱建物、地下室、井戸などが検出。

〇文京区

株式会社パスコ　2011.3『東京都文京区 本郷台遺跡群 第2地点』

※加賀藩本郷邸東南の一角の調査。明暦大火前までの旗本屋敷地の遺構を検出。加賀藩邸に関しては出土遺物と遺構の対比から、五段階に時期設定。

文京区教育委員会　2011.4『春日町（小石川後楽園）遺跡 第11地点』

※近世初期は武家屋敷、明暦大火以降は水戸藩上屋敷の調査。5期の土地利用変遷を確認。緑釉瓦出土。17世紀初頭から前葉頃の遺物が多く出土。

東京学芸大学考古学研究室　2010.3『讃岐高松藩・陸奥守山藩下屋敷跡』

※礎石建物、地下室、漆喰塗り施設、掘立柱塀、箱掘り状溝などを検出。

〇豊島区

豊島区教育委員会　2011.3『巣鴨町 XⅣ　－東京都豊島区・巣鴨遺跡（清和小学校校庭地区）の発掘調査』豊島区埋蔵文化財調査報告34

※町人地の調査。区画溝、土坑、堀、植栽痕などを検出。遺物は18世紀を中心に17世紀後半～19世紀後葉。

としま遺跡調査会　2011.5『巣鴨 Ⅵ』としま遺跡調査会調査報告6

※武家地の調査。享保10年改易となった松本藩水野家下屋敷に関わる境堀などを検出。

としま遺跡調査会　2011.6『巣鴨 Ⅶ』としま遺跡調査会調査報告7

※松本藩水野家下屋敷と津藩藤堂家抱地との境堀を埋没谷中から検出。

〇台東区

台東区文化財調査会　2004.3『東京都台東区 上野忍岡遺跡 上野動物園ゾウ舎地点』台東区埋蔵文化財発掘調査報告書 24

※寛永寺子院寒松院などの調査。

台東区文化財調査会　2010.11『東京都台東区 芝崎三丁目遺跡 西浅草三丁目28番地点』台東区埋蔵文化財発掘調査報告書 51

※日蓮宗慶印寺の調査。方形甕棺墓、円形木棺墓、火葬蔵骨器などを検出。

台東区文化財調査会　2010.11『東京都台東区 池之端七軒町遺跡 池之端二丁目1番地点』台東区埋蔵文化財発掘調査報告書 52

※下野喜連川足利家屋敷跡の調査。

台東区文化財調査会　2010.12『東京都台東区 上野忍岡遺跡群 上野桜木町二丁目4番地点』台東区埋蔵文化財発掘調査報告書 53

※寛永寺子院跡の調査。

台東区文化財調査会　2010.12『東京都台東区 上野忍岡遺跡群 上野桜木町一丁目15番地点』台東区埋蔵文化財発掘調査報告書 54

※寛永寺子院跡等の調査

台東区文化財調査会　2010.12『東京都台東区 駒形遺跡 駒込一丁目4番地点 第1次調査・第2次調査』台東区埋蔵文化財発掘調査報告書 55

※町屋跡（第1次調査）、社地跡・町屋跡（第2次調査）の調査。

台東区文化財調査会　2010.12『東京都台東区 浅草駒形二丁目遺跡 駒形一丁目8番地点』台東区埋蔵

文化財発掘調査報告書 56

※社寺地、町屋跡の調査。玩具型など出土。

台東区文化財調査会　2010.12『東京都台東区 二長町東遺跡 台東一丁目35番地点』台東区埋蔵文化財発掘調査報告書 57

※大名屋敷（厳原藩対馬宗家上屋敷）の調査。建物跡、瓦敷き遺構などを検出。

台東区文化財調査会　2010.12『東京都台東区 上野忍岡遺跡群 上野桜木町一丁目10番地点』台東区埋蔵文化財発掘調査報告書 58

※寛永寺子院養寿院・松林院などの調査。地下室13基、井戸11基、墓壙15基、地震痕などを検出。

株式会社ジオダイナミック　2011.3『東京都台東区 浅草寺遺跡 浅草二丁目7番地地点』台東区埋蔵文化財発掘調査報告書 58

※浅草寺社寺内の調査。

○府中市

府中市教育委員会　2010.9『武蔵国府跡　御殿地地区（仮称）の調査』

※徳川家康の府中御殿に関わると考えられる遺構群を検出。

○福島県

会津若松市教育委員会　2010.3『若松城若郭内武家屋敷跡 黒河内伝八・横山伝蔵・赤埴平次邸跡』会津若松市文化財調査報告書 第123号

※武家屋敷地の調査。武家屋敷に関する建物跡、井戸、池などを検出。

会津若松市教育委員会　2010.3『史跡若松城跡 Ⅶ』会津若松市文化財調査報告書 第125号

※御三階の一部と考えられる石敷き遺構を検出。

会津若松市教育委員会　2010.8『若松城若郭内武家屋敷跡 簗瀬元次郎邸跡』会津若松市文化財調査報告書 第126号

※武家屋敷跡の調査。池、土坑、区画溝などを検出。

会津若松市教育委員会　2011.3『井上丘隅邸跡』会津若松市文化財調査報告書 第127号

※武家屋敷跡（井上丘隅邸）の調査。

会津若松市教育委員会　2011.3『若松城郭内武家屋敷跡』会津若松市文化財調査報告書 第129号

※郭内の外側に巡る濠の一部を確認。

白河市教育委員会　2011.3『桜山遺跡発掘調査報告書』白河市埋蔵文化財調査報告書 第60集

※江戸時代後期の白河藩主松平定信の別邸とされる。柱穴列、土坑などを検出。

○神奈川県

株式会社盤古堂　2011.3『神奈川県小田原市　小田原城下筋違橋町遺跡第Ⅳ地点』

※東海道小田原宿の町屋の調査。小田原宿では初めて町屋表と裏部分の区画を検出。飲食関連陶磁器類、揃い物、焼継のあり方など近世末の宿の様相を示す好資料が出土。特に18世紀中葉から幕末にかけてのガラス製品が多量に出土。

○山梨県

甲府市教育委員会　2007.3『甲府城下町遺跡 Ⅳ』甲府市文化財調査報告39

※上水跡、井戸、廃棄土坑などを検出。

甲府市教育委員会　2010.3『甲府城下町遺跡 Ⅴ』甲府市文化財調査報告52

※甲府上水跡、溝、井戸、建物跡、埋桶などを検出。

甲府市教育委員会　2010.11『塩部遺跡（朝日小学校構内）』甲府市文化財調査報告53

※遺物散布地の調査。

甲府市教育委員会　2011.2『武田城下町遺跡 Ⅶ』甲府市文化財調査報告54

※溝跡、土坑などを検出。

○静岡県

伊豆の国市教育委員会　2011.3『伊豆の国市埋蔵文化財調査報告 Ⅴ　－願成就院跡第1・2・4・5・6・7・8次発掘調査報告』伊豆の国市文化財調査報告 NO.7

※中世初頭からの寺院跡の調査。

○京都府

(財)京都市埋蔵文化財研究所　2010.9『平安京左京八条三坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-6

※平安時代前期から江戸時代前期にわたる七条大路路面などを検出。

(財)京都市埋蔵文化財研究所　2010.11『史跡旧二条離宮（二条城）』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-12

※二条城関連の調査報告。路面、石列、瓦溜りなどを検出。

(財)京都市埋蔵文化財研究所　2010.12『法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-10

※江戸時代末期から明治初頭にかけての整地層などを検出。

(財)京都市埋蔵文化財研究所　2010.12『法性寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-11

※土坑などを検出。

(財)京都市埋蔵文化財研究所　2011.2『大藪遺跡・大藪城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-13

※江戸時代後期の整地層、耕作溝、柱穴、水路などを検出。

○兵庫県

伊丹市教育委員会　2011.3『兵庫県伊丹市 有岡城跡発掘調査報告書ＸＶ』伊丹市埋蔵文化財調査報告書 第38集

※城館跡、生産遺跡の調査。

○岡山県

岡山市埋蔵文化財センター　2011.3『中島遺跡』

※17世紀初頭～前半期の集落跡を確認。

○高知県

高知市教育委員会　2011.3『史跡 高知城跡』高知市文化財調査報告書 第35集

※高知城に関する石列、土坑、瓦溜まりなどを検出。

○佐賀県

有田町教育委員会　2010.3『国史跡天狗谷窯跡－史跡肥前磁器窯跡（天狗谷窯跡）保存整備事業報告書』

※1630～60年代頃に操業した磁器窯の保存整備事業報告書

有田町教育委員会　2011.3『小溝上窯跡』

※有田の初期の代表的な窯跡の一つ

有田町教育委員会　2011.3『白焼窯跡』

※江戸時代の文献に見られる「幸平山」「下幸平山」「本幸平山」に属すると推定される窯跡の調査。

唐津市教育委員会　2010.3『星賀城塞群 Ⅲ』唐津市文化財調査報告書　第152集

※星賀城塞群に関する遺構群を検出。

唐津市教育委員会　2010.3『獅子城跡 Ⅲ』唐津市文化財調査報告書　第153集

※獅子城跡に関する遺構群を検出。肥前陶磁器を始め、輸入陶磁、志野焼、備前焼などが出土。

〇大分県

中津市教育委員会　2011.3『沖代地区条里跡早取地区・永添坂本地区・佐知遺跡・加来東遺跡・中津城（Ⅷ）・長者屋敷官衙遺跡』中津市文化財調査報告　第54集

※中津城関連の石垣、土塁の調査報告

中津市教育委員会　2011.3『中津城跡２』中津市文化財調査報告　第53集

※中津城関連の石垣、堀の調査報告

〇沖縄県

沖縄県立埋蔵文化財センター　2011.3『基地内文化財 5－普天間飛行場内範囲確認調査　喜友名前原第三遺跡　喜友名東原第三遺跡－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第61集

※グスク時代～近世の列状ピット群などを検出。